

- ・菊地恒雄さんに聞く／地名研究の面白さ、奥行きの高さ
- ・おススメの本 『持続する郊外』
- ・自治研センター活動日誌
- ・川崎市の主な動き

日本地名研究所/川崎地名研究会 発足から40年を経て 菊地 恒雄さん（日本地名研究所事務局長）に聞く

地名研究の面白さ、奥行きの高さ



「地名」の由来をたどることで私たちは、遠い先人の暮らしの営みや自然地形、風土の歴史を知る手がかりを得ることができます。その意味で、地名とは無形の貴重な文化遺産といえます。

川崎の地で日本地名研究所（高津区溝口）が設立されて40年以上（1981/昭和56年）が経ちます。また昨年は、地元の市として、日本地名研究所を支えることを第一の目的に結成された川崎地名研究会（1983年）も40周年を迎えました。そこで現在、日本地名研究所の事務局長であり川崎地名研究会会長でもある菊地恒雄さんに、地名研究がもつ意義やその面白さ、奥深さなどについて、語ってもらうことにしました。（編集部）

地名研究との出会い——菅小学校のころ

——まず、菊地さんの地名研究との出会いについて教えてください。

菊地 地名というのは誰にとっても当たりまえのもので、こと改めて関心をもって研究する人はそう多くはないですね。たまたま私、小学校の教員をやっていて、その関係で自然体で地名研究の世界に入っています。

大学時代は地理学を専攻していたので、川崎市で教員になってから小学校社会科教育研究会に所属し

たんですが、その一環で地名の由来ですとか、地域の歴史や文化に関心をもつようになりました。

最初の赴任は多摩区の菅小学校でした。たまたま菅小学校が創立100周年を迎え、社会科教育研究会に所属していたこともあり、100周年の記念誌づくりに関わるようになったんです。当時、学校と地域の関係はそんなに濃くなくて、学校から地域に出ていくという機会もあまりなかったんですが、100周年誌の編纂委員会を通して、地元の歴史に詳しい人たちと知り合う機会が多くできました。

そうした人たちの話を聞きに出向きますと、実に

楽しく語ってくれるんです。教師が社会科の授業で町に出て行って、子どもと一緒に聞く話以上のいろいろなことを教わるんですね。家の中の倉庫、蔵の中にも上げてくれますし、使わなくなった農具や生活器具のことですとかね。そこで出てくるのが地図に載っていない、いわゆる通称地名なんです。それ、何ですかと聞き返すと、おれたちのところは何々島っていったんだよと。「島」というと、周りが海や川で囲まれている土地をイメージしますが、そうした意味ではない「シマ」。

——暴れ川だった多摩川の流路にできた集落……。

菊地 そうですね。多摩川の氾濫で入れ替わる流路の後にできる微高地の集落を地元の人たちは「シマ」と呼んでいたんですね。菅稲田堤の「ナカッチマ（中島）」「シタッチマ（下島）」「マエッチマ（前島）」「ウラッチマ」とか、地名としては残ってなくても、地元の人たちの記憶の中に地域の共同体として「シマづきあい」の言葉が残っているんです。

それから多摩川の漁業組合の話とかね。漁業協同組合というと海辺の協同組合が普通ですが、多摩川にはちゃんと川魚を扱う漁業組合があったんです。そういう人たちからも話を聞いて、またその人たちが共同して守っていた渡し場の話だとかが手に取るようにわかってくるわけですね。それと先輩の教員の中にも古い資料をきちっと調べていた人もいたんです。そうしたつながりの中で、自然体で地域を見る目が養われていったんだと思います。そこに社会科教育研究会の大先輩だった白井禄郎さんがいらしゃった。白井さんは、後で知ったんですが、なんと日本地名研究所の理事だとか、そういう役割をちゃんと担われていたんですね。

——そうした菅小学校時代での多くの出会いが菊地さんの地名研究の原点ということでしょうか。

退職後、本格的に地名研究の道に

菊地 そうですね。その後、宮前区の小学校に異動するんですが、その時に学習指導要領が変更になり、小学校1、2年の社会科が生活科に変わります。それで市の教育委員会から地域学習の教材づくりの委嘱を受けました。その一環で、学校周辺の町名の変遷ですとか、田園都市線沿線の開発の歴史を調べるため、町内会長宅や旧家を訪ねたりしました。そんな中で、東部62連隊の演習場のため村がそっくり

移転させられたこと、また戦後返還された後、現在のように住宅開発などで大きく様変わりしていったことなど、次々と新しい発見があったりしました。

ただ、そのうち学校の仕事が忙しくなり、しだいに地名への関心から遠ざかり、停年退職を迎えました。それで何をやろうかなと考え、若い時代に地名に興味をもっていたことを思いだして、地名資料室を手伝おうと思ったんです。そうしたら、すでに行く人が決まっているということで、断られたんですよ。それで5年間ぐらい、母の介護をしたりしてたんですが、少し暇になってきたものですから、川崎地名研究会に加わるようになったんです。

それで、関わり出したら止まらない性分なものだから、地元の神社の由来とか全国にある共通名の神社について報告させてもらったりとか、ちょっと手伝っていい？ とか言って、一緒になって活動をはじめたりしました。そういうことを繰り返しているうちに、研究会のメンバーも年齢が高くなってきていたので、役員をやれとなり、また日本地名研究所からも、事務局を少し手伝ってくれということになったわけです。しかし、手伝うようになると、課題も見えてくる。

——だんだん深みにはまっていったんですね。

菊地 そうですね。それで今日まで続いているということですね。

——現在、菊地さんは日本地名研究所の事務局長であり川崎地名研究会の代表ですが、それぞれ就任されたのはいつごろでしょうか。

菊地 川崎地名研究会の代表が2014（平成26）年で、日本地名研究所の事務局長になったのが2018（平成30）年ですね。

——日本地名研究所の活動に関しては後ほどお聞きするとして、その前に、一般の市民が地名に関心をもつときに、どの辺に着目すると、地名の面白さと言うか、奥深さみたいなものが見えてくるのか、教えていただけますか。

地名への興味は身近なところから

菊地 私は川崎市民アカデミーの川崎学コースで講座をもったりしていますが、心がけているのは、地名とはこういうものだとかね、頭から押し付けない。要は参加している人たちが関心を持っていることをベースに、そこにたまたま出てくる地名の由来

などを伝える。そうするとね、えっ、そんなつながりがあるんですかとかね、そういう反応が結構返ってくるんです。

例えば、全国にある川崎という地名を一覧にした冊子をつくってその分布を見せると、確かに三分の一は河口にある。だけど、あとの三分の二は流域の中腹だったり、上流部にもあるんですね。そうすると我々は川崎という地名の由来は河口にあるからだとしか考えないんだけど、それだけではないんだよと。実は、川崎の「さき」は「前」なんだと。ここ川崎は川の先っぽだから、それで説明つくけれども、ほかのところは決してそうじゃないんだと。

——そうすると、みんな、えっ？ となる。

菊地 そう。前という字を「サキ」と読めば、例えば宮前区は元々は宮の前と書いて、「ミヤサキ」って読ませていた。では、なぜ今は宮前（ミヤマエ）なのかとなる。実は、明治のころまでは宮前村と書いて「ミヤサキムラ」と呼んでいたんですね。ところが昭和13年に宮前村が川崎市に編入されたときに、川崎区にも宮前という地名があったので、おまえのほうは前って書かないで、山ヘンの崎を書けというふうに上から命令されるわけです。そんな経過もあって昭和20年に軍用地が返還された折に、馬絹などの一部に「宮崎（ミヤザキ）」という地名がつく。その後1982（昭和57）年に高津区から分区して宮前区ができますが、漢字としてはここで宮前が復活する。しかし「前」は「サキ」と読まないことで今に至っています。

それから合併問題だとか、都市が広がっていくにしたい、地名もまた変わっていくんです。例えば、多摩区の生田は、上菅生村と五反田村が合併して、二つの名をとって生田村になったとか、そういう具体の話をしてあげることによって、自分たちの住んでいるところの姿が見えてくる。

入口は漢字からではなく発音から

菊地 では、川「カワ」はどうか。「カワ」という言葉に漢字を充てると、川（河）、皮（皮革）、側などがありますね。ここでポイントになるのは、その漢字の違いにとらわれずに、発音に注目して、その共通性を考えるんです。そうしますと、「カワ」とは、左右の事象の間において両者を区切るものという意味が浮かび上がってきます。つまり左岸と右岸の間

を区切る「川（河）」。また内側の身体と外の世界を区切るものとして皮（皮膚）。それから道路の右側・左側、海側・山側の「カワ」もそうですよね。——地名を考えると、漢字から地名の由来を考えるのではなくて、発音から入っていくと、連想が広がっていく……。

菊地 そうですね。同時に、その発音の1つずつを分解する必要があるんですね。例えば「ミ」という言葉があると、漢字で幾つ書けますかとなる。「ミ」には「水」「三」の他に「神」「御」などいっぱいある。そこで、例えば東京都港区に三田ってありますよね。三田という地名は、田んぼが三つあったからではないんです。三田には御田八幡宮という神社があるんですけど、そこには「御」という字が書いてある。しかし、江戸時代に御田の「御」が簡略化して「三」と表記するようになったんですね。もっと遡れば、神様の田んぼで、神田（ミタ）から御田になり、三田となって今に至っているんです。

さらに言えば、「ミ」は「御」もあるんだけど、「水」なんですね。それから神様の「神」なんですよ。そういうのを整理していくと、「ミ」という1つの文字だけで、いろいろなパターンが見えてくる。そういうのをやっぱりきちんと考えて見てくださいと。漢字はあくまで当て字。特に江戸時代になってくると、読めればいいんですからね。どんな字を書いたって、誰も文句を言わない。だから、そういうのを知っていて地名を話すと、その土地を知る深みがまったく違ってくるんです。

——だんだん、地名の面白みが見えてきたような感じがします。

菊地 世田谷区の三軒茶屋近くに三宿（ミシュク）という地名がありますが、もともとは水宿と表記されていた。「宿」はとどまる、たまるなどの意味です。つまり水宿は、三つの宿場があった場所ではなく、水がたまる場所なんです。事実、北沢川と烏山川がぶつかり、目黒川に流れ込む合流地点が現在の三宿なんですね。

——なるほど、そういうふうには地名をたどっていくと、今は見えなくなった地形が浮かび上がってくる感じですね。川崎の場合はどうなのでしょう。

橘樹郡の由来は「タチ・ハナ」

菊地 川崎市域の大半は昔は橘樹（タチバナ）郡で



谷川健一・日本地名研究所初代所長

したが、橘樹（橘）は、当て字ですね。橘樹ですから柑橘類が豊かに実る土地を連想しますが、古文書では立花郡とあります。立花を音で分節すると「タチ・ハナ」となる。「タチ」は崖のことで、「ハナ」は先端を指すんです。

——崖の先端ですか。

菊地 そう。東京北区の田端もそうですね。田端の「タ」は、田んぼの意味ではなくて、処の意味で、場所をしめす言葉です。ですから田端は、武蔵野台地の先端の地を意味しますし、事実、多摩丘陵の傾斜地、崖が多くある川崎の地形と田端は似てるんですよ。そういうふうに説明してやる。

——そうすると土地のイメージがグッと変わる。

菊地 そうそう。

——要するに、言葉の音声と漢字の意味をいったん切り離して、考えるということですね。確かに、日本列島に漢字が入ってくるのは奈良時代というか、大体5世紀から6世紀と言われていますよね。しかし、地名はそのはるか前の、文字がなかった時代から口伝で存在しているわけですから、地名の由来を発音からずっと解き起こしていくと、古代の地形、あるいは暮らしぶりなどが浮かび上がってくる。そういう意味でやっぱり地名というのはおもしろいですね。

自然災害と動物・植物地名の関連

菊地 そうということですね。ところで、そのことと関連してきますが、日本は山崩れ、地すべり、洪水などの自然災害が頻繁に起きますが、実は自然災害と地名は密接な関係があるんです。

——それは、川崎の地名からもわかりますか。

菊地 川崎市は2014（平成26）年に土砂災害のハザードマップを発行して、市民に危険度を周知しましたが、日本地名研究所は市の受託事業として「地名が教える地形の歴史―川崎の地形から見た災害地名や崩壊地名」という調査をして、災害地名や崩壊地名を重ね合わせた資料を作成しました。もちろん担当のまちづくり局の了解を得ての作業ですが、そこ

から、例えば植物や動物地名と自然災害の関連などが見えてきました。

——どういふことでしょうか。

菊地 麻生区の王禅寺地区に、花の木とか花島という地名がありますが、花は崖の先端（ハナ）で、島は「なわばり」（周辺一帯）です。宮前区の花の台も丘陵の先端にある。栗もそうですね。クリは、崖に穴が開く「刳る＝ク・ル」が訛って「栗」になる。また「梅」のつく地名は、崩壊地などを「埋める」からきている。それから百合丘付近に雉ヶ谷がありますが、キジは岸（キシ）が訛ったもので、崖を意味します。面白いのは、そうした丘陵の端や崖付近にはそうした植物や動物が生息していて、そこから梅や栗や雉の地名につながっています。

動物で言えば、ヘビや龍も危険地名の一つになりますが、龍やヘビは川の流れを意味していますから、近くには災害をもたらす大きな川や池がある。ですから「蛇崩」だとか「蛇抜け」といった地名が残っている。昔の人たちは、ヘビや龍は暮らしの中に生きていたんですが、近代の人間になると、ヘビと地名がついただけで忌み嫌ってしまって、そんなところに住みたくないとなって、緑や桜になってしまいうわけですね。

地名が宿す力

——なるほど。動物名は、一面では恐れつつ、しかし敬いの対象でもあった……。

菊地 龍神様だとかね。地名の一つ一つはなんでもなないもの、小さなものですが、しかし、その小さな地名にはその土地に対する畏敬の心というか、怖れと愛着が入り混じっていることが分かりますね。でも宅地開発などで傾斜地や崖もフラットになってしまって、地名自体が消えてしまうんです。しかし、地名の下層には自然とともに暮らしてきた人たちの記憶が隠されていることを忘れるべきではないですね。

——地名は単なる記号ではない、と。

菊地 そうということですね。地名という小さきものに宿る力を知る、そこに地名研究の面白さ、奥深さがあるように思いますね。

川崎の地形は大きく、多摩川の沖積平野と多摩丘陵に分けられます。東京の八王子付近から町田、多摩、稲城市から横浜市北部に連なる丘陵が多摩丘陵

になりますが、ここには谷・谷戸（ヤト）地名が多くあります。川崎だけで228ヵ所もありますが、ヤトの付近には必ず川が存在し、崖を含む傾斜地があります。つまりヤトは災害を想起させる場所でもあるんですが同時に、いのちの源となる水を得る場所でもあったんですね。池ヶ谷、池田谷戸など池の付く谷戸が多摩丘陵には13ヵ所残ってますが、これは湧水でできた池や灌漑用の溜め池のある谷戸です。泉谷、清水谷もそうです。谷筋の奥まったところには後谷戸、裏入谷、入谷戸があります。

——なぜ地名を残すことが大事なのか、実感できてきました。そのことが分かったうえで、日本地名研究所の活動についてお聞きすることにします。

柳田國男から谷川健一へ

菊地 日本地名研究所がスタートしたのは1977（昭和56）年ですが、その前年に「地名を通して『地方の時代』を考える全国シンポジウム」が川崎市の市民プラザで開催されています。その時、歌人の馬場あき子さん、作家の井上ひさしさんが登壇してますね。当時の役員名簿を見ますと、歴史学、民俗学、文学者、作家、歌人等々、当時第一線で活躍されていた著名の方々が名を連ねています。なぜ地名研究にそうした人たちが集まったのか。その背景には、1960年代の高度経済成長の波の中で、「住居表示に関する法律」に代表されるように、従来の古い地名を勝手に改変できる時代になって、そこに危機感があったからでしょうね。その先頭に立っていたのが、民俗学の谷川健一さんでした。

——谷川健一さんは2007年に文化功労者に選ばれていますし、川崎市文化賞も1992（平成4）年に受けておられる。

菊地 地名研究は日本民俗学の創始者である柳田國男を抜きには語れませんが、柳田の思想を受け継ぎつつ独自の世界を築いたのが谷川健一さんでした。二人とも在野の研究者ですが、小さきものの思想を大事にしていたことは共通してますね。

谷川さんは2015年に亡くなりますが、私が谷川さんと関わったのは晩年の3年ほどで、実はその時、地名研究所の次の代表を誰にするか、決めていなかったんです。谷川さんの存在が大きすぎて、そこまで思い至らなかったんですね。それで当時、川崎地名研究会の会長をなさっていた相澤一男さんと相談



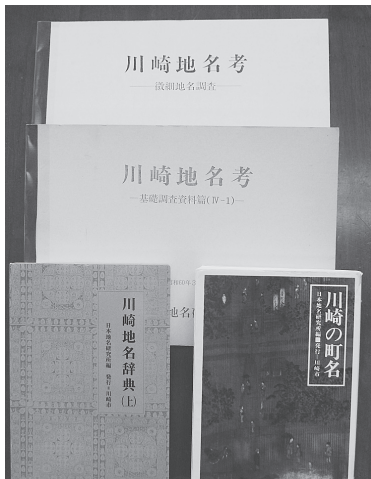
まち歩き（羽田の渡し場付近）

して、筑波大学を退官された谷川彰英先生にお願いして引き受けてもらいました。しかし谷川彰英さんも交代し、三代目が関和彦さん。出雲風土記の第一人者の方ですが、関さんもまた三年で亡くなられて、現在は民俗学の金田久璋さんが所長です。三人の代表の方にはそれぞれ個性を発揮してもらい、どうにか40周年を迎えることができました。

創立以来、一貫して変わってないのが毎年、全国地名研究者大会を開催していることですね。最初の10年ほどは川崎で開催していましたが、その後は全国で交代して開いています。それと一時休刊していた情報誌『地名と風土』を二代目所長の時代に復刊して、16号まで発行しています。現在、会員組織は全国で40団体、会員は200名です。ただ地名という限定した分野の活動で、賛同する同志を集めるのは容易でないことも事実で、今後各地域でどう取り組んでいくか、問われていることは確かですね。

——谷川健一さんが残された仕事を一言でいえるんでしょうか。

菊地 谷川さんの仕事に対して、「谷川民俗学」と言われますが、この表現には好悪二つがあって、民俗学を専門とする人たちの一部からあまり評価されなかったことは確かです。それは自分たちが研究してきた民俗学の方向とあまりにもかけ離れていたからです。しかし、地名研究について、谷川さんは「歴史学、地理学、民俗学、国語学等々の研究に役立てることのできる、風土を媒介とした諸学問の協力と総合による新しい学問分野、それを仮に『風土学』と呼ぶとすれば、そうした学問の誕生を予測させる」と、述べていますが、その通りだと思いますね。私にとって一番心に残ることばは、やはり「地名は大地に刻まれた歴史の索引」ですかね。それと「小



川崎市民の協力でまとめられた地名研究の成果

『川崎の町名』改訂版の刊行にあたって【抜粋】

平成三年の『川崎の町名』の初版本が刊行されて三十数年が経過しました。この間の世の中の変化は従来のスピードとは比較にならないものでしたし、この先の変化は想像すらできないほどです。

地名は、土地の由来や変遷などの歴史を現すものであり、地域にとっての貴重な文化資源ですが、過去からの地名が歴史の経過とともに失われつつあり、地名に関する研究を広く普及し後世に残していかなければなりません。

令和六年七月に川崎市制100年を迎えるにあたって、私たちの願いを川崎市にご理解いただき、『川崎の町名』改訂版を刊行することができました。この冊子によって、足元の地域を知り、生活の基盤となる街の姿を身近に感じることで、川崎市をそしてわが町を大切にする心が芽生えてくることを、読み取ってほしいと願っています。

令和六年三月 日本地名研究所

さき者の声を聴く」ということ。これが地名運動の変わらない「原点」ですね。

『川崎地名考』から『川崎の町名・改訂版』まで

——日本地名研究所が発足した2年後に川崎地名研究会がスタートしています。

菊地 初代会長が藤田親昌さん。中央公論の編集長もなさった人で、川崎の文化行政に尽力された人です。二代目が歌人の相澤一男さん。相澤さんは活動の幅はひろく、誰もが相澤さんの言うことなら協力しようというような人柄の人です。ひょんなことで私が三代目を引き受けていますが、川崎地名研究会もこの40年間、お二人の力があってここまでこれたと思っています。

——1991年に『川崎の町名』を、2004年に『川崎地名辞典（上・下）』を編纂してますね。

菊地 2冊の本の下敷きになっているのが、研究会が発足当初から取り組んだ「地名悉皆調査」です。川崎市の委託調査でしたが、ここに市内の歴史研究会や郷土史会、万葉集など古典を読む会などから協力を得て実施しています。その調査をまとめたものが、全10巻の『川崎地名考』で、その内容を各区の町名別に編纂したのが『川崎の町名』となります。さらに同書に収録できなかった内容を、江戸時代の村単位で収録したのが『川崎地名辞典（上・下）』で、市政80周年を記念して出版しています。

私たちがいま目にしている行政区画の地名は、明治22年の市制町村制が基礎になっていますが、元をたどれば江戸時代の村名がルーツです。例えば地名

研究所のある高津区でいえば、溝口、二子、久本、久地、下作延などの江戸時代の集落（自然村）を統合して、高津村（行政村）がつくられますが、溝口や二子などの村名は大字（おおあざ）として残ります。また村人たちが使ったより小さな場所も小字（こあざ）として残る。昔は、田んぼの一枚一枚に持ち主の名前や屋号、立地などをもとにした名前が付けられていて、それが小字ですが、その基礎データとなっているのが江戸後期に編まれた『新編武蔵風土記稿』です。この武蔵風土記稿は、最初の地名悉皆踏査から一貫して川崎の地名研究の基本史料になっていますが、地名辞典ではこうした小字それから地域で伝承されてきた通称地名、寺社や旧蹟の来歴などをまとめています。

ただ、調査の段階で十分解釈できていない部分が残っていることも事実で、その部分を補充する意味もあって、今年3月に、市制100周年記念として『川崎の地名』改訂版を発行することができました。

——改訂版の狙いは何でしょうか。

菊地 『川崎の町名』改訂版の発行を通して地名に関わる人たちの底辺を広げることを目的としています。そこで改訂の趣旨を市民に伝えて、一緒に編集作業をしませんか、と呼びかけました。マスコミもとり上げてくれて40名を超える応募がありました。説明会の後にグループ分けして活動を行い、ときどき学習会を開いて、それぞれのグループのやり方を参考に活動を深めてきました。

——改訂版の発行の他にどんな活動がありますか。

菊地 先ほど少し触れましたが、8年ほど前から川

崎市民アカデミーの「川崎学」コースに関わっていて、いろんなテーマで講座を実施しています。例えば「山の信仰」というテーマで、地元の浅間塚や御嶽信仰を学び、青梅の御岳山に御師の家を訪ねて直接話を聞いたり、川崎大師では、本堂に入って念仏講を体験もしました。まち歩きでは、八丁畷から鶴見まで旧東海道を歩くとか、柳田國男の本を手にして多摩市まで出向いたり、多摩丘陵の歴史のあるお寺や神社を訪ねたりとか、数え上げればきりがありません。でも、そうした活動の中から、地名に関心をもつ人材も多く育ってきて、『川崎の町名』改訂版でも多くの方が参加しています。それから今年の夏に、川崎市民アカデミーから『再考 二ヶ領用水』という本を出版する予定になっています。

——「再考」ですか？

菊地 実は、2011年に川崎市民が主体になって「二ヶ領用水竣工400年記念事業」がはじまり、現地を歩くなど史料の発掘をやったんです。川崎地名研究会も参加したんですが、従来の研究や定説とはちがう事実がいくつか発見されたんです。二ヶ領用水の開削といえば、小泉次太夫や田中休愚の功績のみに光が当てられがちですが、現地を歩いてみると、用水の幹線、分水のほとんどが旧多摩川の流路跡を巧みに利用していることが分かってきたんです。また二ヶ領用水は多摩川だけではなくて、支流の三沢

川、五反田川、平瀬川なども合流して有効に用水として使われているんです。こうした事実から、流域の農民たちの知恵や力によって営々と築かれてきたことが見えてきたんで、「再考」なんです。

——なるほど。ここでも無名の小さき者たちの知恵や力の発見があったということですね。

住居表示行政にも関わるようになる

——最後になりますが、川崎市の地名の取り組みについては、どう評価されていますか。

菊地 川崎市は、基本的には昔の村名は残すという方針ですし、新しく町名をつくる場合、できるだけ地域の歴史、伝統、文化を生かすという考え方をもっていますので、そこは他の自治体と比べて、よくやっていると思います。ただ、これまで日本地名研究所との関係は、資料の提供はしてきましたが、強くはなかったんです。それが5年ほど前からですが、住居表示を変える場合に設けられる懇談会に私どもも参加するようになりました。そこに至るまでには、けっこう働きかけはしましたが、今はそこでいろいろ相談を受けたり、提言できるようになりましたね。

——それを聞いて安心しました（笑）。今日は、地名研究が着実に川崎に根づいていることが分かり、ありがとうございました。（聞き手：大矢野修）

自治研センター活動日誌 2023年12月～2024年3月

2023年12月

- 1日(金) NPO暮らしづくりネットワーク北芝埋橋
伸夫理事長
- 3日(日) カフェグランデ
- 4日(月) 神奈川自治研センター財政セミナー
- 9日(土) 市民アカデミー30周年記念シンポジウム
- 10日(日) 市民アカデミー30周年記念論文審査会発表会
- 12日(火) ヘイト学習会
- 15日(金) 勁草塾
- 16日(土) 川崎地名研究会40周年記念シンポジウム
- 17日(日) 村上市佐藤順前市長面会
- 18日(月) 村上市高橋邦芳市長訪問
- 19日(火) 関川村移住定住サポートセンター視察
関川村CROSSWALK視察
- 22日(金) ヘイト相模原集会

2024年1月

- 10日(水) 川崎市職労旗開き
- 15日(月) 生活クラブ新春のつどい

- 16日(火) NPOしんゆり・芸術のまちづくり理事会
- 24日(水) ヘイト事務局会議
- 29日(月) 川崎教育研究所文化講演会

2月

- 5日(月) 箕面市調査
- 6日(火) 大阪市西成区調査
- 11日(日) ヘイトキャンペーン
- 13日(火) 川崎臨海部フォーラム
ヘイト事務局会議
- 16日(金) 文庫カフェ
- 21日(水) 神奈川県地方自治研究センター理事会
- 27日(火) しんゆり芸術のまちづくり交流カフェ
NPO しんゆり・芸術のまちづくり交流会

3月

- 12日(火) NPO しんゆり・芸術のまちづくり理事会
- 15日(金) 神奈川県自治研センター総会
- 22日(金) 福島県文化振興財団砂田和道文化推進課長
- 24日(日) 子どもの権利学習会

おススメの本

「持続する郊外 住民主導のアーバニズム」(新百合ヶ丘地域研究) 川崎新都心まちづくり財団監修 平本一雄編著 青弓社



本紙「クォーターリーNo.27」でしんゆり・芸術のまちづくりを紹介した。この本は、新百合ヶ丘地区を文化・芸術だけでなくさまざまな分野の視点から専門家が調査研究した報告書を、研究グループを統括した川崎新都心まちづくり財団の特別顧問で都市計画を専門とする平本一雄東京都市大学名誉教授が編んだものである。この本の制作にあたって、まちづくり財団の資金や地元の田園調布学園大学、和光大学、昭和音楽大学、日本映画大学などの大学教員がたずさわるなど、新百合ヶ丘の恵まれた環境がその背景にある。

第一部は、編著者が「郊外社会の持続型モデルを知る一麻生地域のケーススタディ」と題し、これらの調査研究を総括している。

第二部は、それぞれの調査研究結果が各章ごとの調査リーダーによって詳細に報告されている。①市街地の形成と地域ルール、②ポストコロナの郊外ライフスタイル、③みどりの恵みのシナジーとその持続コスト、④市民が生み出した芸術文化のまち、その評価、⑤居心地よく持続可能な郊外生活のための商業・サービス、⑥子ども・子育て支援の地域間比較、⑦男性退職者のメンタルヘルス、補論として町のスケールでのウェブ調査のあり方についてで構成されており、都市計画、社会学、環境、文化・芸術、福祉、商業、統計などさまざまな分野の研究者が地元住民のアンケート、インタビューを行いながら実証的に示したアンソロジーとなっている。

小田急線新百合ヶ丘駅周辺は、人口155万人の川崎市の、最北端の丘陵部に位置し、18万人が住む麻生区の中心地になっていて、小田急多摩線の開業に合わせて未開の地に40年前に作られた街である。駅から徒歩圏内には5～6万人程度が住み、ホワイトカラー層の高所得者が多く、緑が多い質の高い居住環境を保っている。40年前の駅周辺の区画整理に伴う開発、20年前の駅北口および南口周縁部の開発、そして10年後には横浜市営地下鉄延伸に伴う再開発が予定されるなど、ほぼ20年間隔でハード施設が整備更新される恵まれた地域になっている。この変化に富む狭い地域について、これほど多様な視点で専

門家が論じている研究誌はまれであり、第一部のタイトルにあるように、他の郊外型まちづくりの参考に資するものである。

2020年度の厚生労働省調査によると麻生区は男女とも長寿日本一になったことが話題になった。これを機に、麻生区役所には取材が殺到したと聞く。市・区としてその理由を問われた際、「区民の健康意識が高い、坂が多く緑が多い良好な自然環境がある」との見解を出した。その根底には、高学歴、高所得者が多いということがある。そしてこの本では、一般的に高齢の男性が閉じこもりがちなところに視点を当て、男性退職者が多く地域社会に参加することで精神的なゆとりが長寿につながることを示している。

本調査研究は、地域住民に直接向き合うことによって実証的な社会調査に基づくことをめざしたが、新型コロナウイルスの感染期と重なり、十分な調査ができなかったことを反省点としている。また、横浜市営地下鉄が延長された後にまちがどのように変わっていくかに、地域住民が大きな関心を示していることがわかる。こうした地域研究が市内の他の地区でも行われ、10年、20年ごとの経年的な調査研究が繰り返し行われることが、市政に期待される。

また、川崎新都心街づくり財団では、この本の出版に合わせて、絵本「丘のまちの物語」ひらもとかずお文・絵を、神奈川新聞社より発刊した。この絵本は、弘法大師がこの地を訪れたという伝説も紹介され、1960年代に開発される以前から今日に至るまでの麻生区の歴史を平本一雄さんが平易な文と挿絵を交えてわかりやすく解説したものとなっている。子どもたちに地域への愛着が育まれることを期待し麻生区内の小学校五年生全員に配布し、図書館をはじめとした公共施設に寄贈された。(記：板橋洋一)



川崎市の主な動き 2023年12月～2024年 3 月

2023年12月

1 日 救急現場の映像をスマホで把握 消防局

市消防局は1日から、救急現場の映像を119番通報者らのスマートフォンで送信してもらい、応急措置の指示などを受けられる「消防Live映像通信システム」の運用を始める。通報を受けた消防指令センターは必要に応じ、119番通報者のスマホにショートメッセージサービス（SMS）で専用URLを送り、映像が映るビデオ通話に切り替えてもらい、映像から適切に指示する。

9 日 開学30周年を祝う市民アカデミー 記念イベント

かわさき市民アカデミーの開学30周年を祝う記念イベントが9、10日の両日、市生涯学習プラザ（中原区）で開かれた。「学び続けることの意味」と題して福田市長、同アカデミー理事長の太田猛彦東大名誉教授、同顧問理事の藤嶋昭東大特別名誉教授の鼎談があり、記念シンポは「新しい時代の市民大学」をテーマに坂口緑明治学院大社会学部教授が基調講演した。10日の記念フェスタでは、体験教室や講演＋ディスカッション、古本市などを開催。

16日 「アリラン ラブソディ」全国ロードに先駆け上映 アートセンター

戦前から多くの在日コリアンが暮らす川崎区桜本のハルモニ（おばあさん）たちの半生を追ったドキュメンタリー映画「アリラン ラブソディ～海を越えたハルモニたち」の上映会が来年2月からの全国ロードショーに先駆けて16日、麻生区の市アートセンターで始まった。毎回、上映後に金聖雄監督キムソンウンのトークがある。初日は7人のハルモニもチマ・チョゴリ姿で舞台に立ち、映画への思いを語った。

26日 危害告知でヘイト投稿初認定 市審査会

市差別防止対策等審査会（会長・元東京高裁長官 吉戒修一弁護士）は26日、市内の特定地域に暮らす日コリアンの住民たちを殺害するというインターネット上の投稿をヘイトスピーチに認定、市が削除を要請することは妥当と判断した。市内のある特定地区の在日コリアン住民の集団に対して、「出ていけ」と排斥する言動をヘイトスピーチと判断した例は1件あるが、危害告知の類型は初の認定。

26日 昼休み時間ずらして混雑緩和 新本庁舎エレベーター

市は26日、市役所本庁舎で勤務する職員の昼休憩時間「正午から午後1時まで」の規定を前後に30分ずつずらせる「ランチタイムシフト」を試行実施すると発表した。10月から業務を開始した25階建て新本庁舎に職員向け食堂はなく、昼食をとるため庁外に出る職員らが一斉に使用するエレベーターの混雑緩和が狙い。試行期間は来年1月1日から3月31日、本格実施は4月1日（予定）から。

2024年 1 月

2 日 被災地支援へ職員等派遣続く 能登半島地震

1日発生した震度7の能登半島地震に伴ない市消防局は2日、消防庁からの緊急消防援助隊の出動要請を受け、消防航空隊1隊（6人）を石川県小松空港に派遣。3日には日本水道協会からの協力要請を受け、応急給水隊5名（給水車、サポート車各1台）を富山県氷見市へ。4日はペットボトル水500ml24本入り684箱を県トラック協会の協力で氷見市へ。6日からは保健師等、7日には国の「応急対策職員派遣制度」に基づき先遣隊3人を輪島市へ派遣。

4 日 自分事として被災地支援を 市制100周年へ市長年頭あいさつ

仕事始めの4日、福田市長は市役所で幹部職員134人を前に年頭の挨拶を行った。冒頭、1日の能登半島地震に触れ、自分事としてとらえ困った時はお互い様の精神で、被災地支援に積極的に取り組むとした。7月に市制100周年を迎える今年は、楽しさやワクワク感を忘れずいい仕事をして、「ありがとう」といわれる年に、と期待を込めた。

4 日 大谷選手からのグローブ届く 市教委

米大リーグの大谷翔平選手から国内の全小学校へ贈られた子供用グローブが4日、市教育委員会に届き、5日中に市立小学校114校と特別支援学校小学部3校の計117校に配布。冬休み明けの9日以降、各学校では全校集会や学年集会などでお披露目を行う予定。グローブは右利き用2個、左利き用1個

の計3個。「このグローブが、私たちの次の世代に夢を与え、勇気づけるためのシンボルとなることを望んでいます」と書かれた大谷選手の手紙が添えられている。

15日 リニア・トンネル「東百合丘工区」調査掘進完了 麻生区4.2㌔

JR東海は15日、リニア中央新幹線の地下トンネル工事の「東百合丘工区」（麻生区）の調査掘進が完了し、現場を公開した。同工区は麻生区東百合丘から片平までの約4.2㌔、品川駅から相模原市緑区に予定される神奈川県駅（仮称）までの「第一首都圏トンネル」（約37㌔）の一部。同社は地域住民への説明会などを経て本格掘進を始め、その後も相談窓口を設ける。

16日 武蔵溝ノ口駅南北自由通路を木質化 脱炭素モデル地区アクション

市は16日、脱炭素モデル地区「脱炭素アクションみぞのくち」での取り組みとしてJR武蔵溝ノ口駅南北自由通路の木質化を行うと発表した。JR改札正面の窓面を木質化し、通路上に木製の円形ベンチ、窓際には生田緑地で伐採したナラ枯れ材活用の鉢カバーに観葉植物を設置、太陽光発電も行う。施工期間は2月1日～3月15日、使用木材は埼玉県産針葉樹サワラ、炭素固定量は0.82t-CO₂。

23日 「UvanceとどろきスタジアムbyFujitsu」 愛称・フロンターレ本拠地

市は23日、サッカーJ1川崎フロンターレの本拠地・等々力競技場（中原区）のネーミングライツ（命名権）を富士通（株）が取得、愛称が「Uvance（ユーバンス）とどろきスタジアムby Fujitsu」に決まったと発表した。「Uvance」は「Universal」と「Advance」を重ね合わせた造語。競技場のある等々力緑地の再編整備事業を進める東急や富士通などが出資の「川崎とどろきパーク」（KTP）がネーミングライツ料2,000万円の半額を市に納付。契約期間2月1日～2029年3月31日。

30日 川崎店前の街路樹伐採でBM社員逮捕 全国初

中古車販売大手ビッグモーター（BM）の店舗周辺で街路樹が枯れるなどした問題で、県警捜査1課と川崎臨港署などは30日、川崎店（川崎区）前の街路樹の伐採に関与したとして、器物損壊の疑いで同社社員（51）を逮捕した。街路樹問題での逮捕は全国初。同社従業員と共謀して2022年10月、川崎店前の歩道上でオオムラサキツツジ6本を切断損壊したとしている。

2月

6日 新年度予算案8712億円（一般会計） 過去2番目の規模

市は6日、2024年度当初予算案を発表した。一般会計は8712億円（前年度比0.5%増）と過去2番目の規模。市税収入は3854億円（同1.1%増）で3年連続過去最高。法人市民税が企業収益の増加で206億円（同17億円増）、住宅の新增築など固定資産税が1356億円（同11億円増）。ふるさと納税による流出額は過去最高の142億円。歳出では子育て支援や障害福祉サービスの拡大など扶助費が全体の3割の2383億円（同3.8%増）、退職予定者増加で人件費が1645億円（同7.0%増）。市制100周年記念関連は8億円、全国都市緑化フェア関連は24億円を盛り込む。減債基金からの借入れは157億円。

9日 友だちに薦めたい読書コン入賞153点 東京応化科学技術振興財団

科学教育の普及・啓発を目的に東京応化科学技術振興財団（中原区・藤嶋昭理事長）が主催する小学生対象の「友だちに薦めたいこの1冊コンクール」の入賞作品が9日発表された。42冊の推薦図書を対象に「読書感想文」、絵やイラストで表現する「本の帯」、短い言葉で紹介する「ポップ」の3部門に4062点の応募から藤嶋昭賞など入賞作品計153点が選ばれた。同財団は2014年から市内外の小中高校に約30万冊の図書を寄贈、出前授業なども行ってきた。

13日 特定地域を「燃やせ」 ネット投稿41件ヘイト認定

市差別防止対策等審査会（会長・吉戒修一弁護士元東京高裁長官）は13日、インターネット上で在日コリアン女性を排斥する投稿29件と、特定地区の在日コリアン住民に「燃やせ」と危害を加えるよう呼びかける書き込み2件をヘイトスピーチと認定した。継続審議の1件について「本邦外出身者を理由にした排除とは認められない」とし、諮問を受けて削除要請が妥当でない初の判断を示した。

15日 出張費不正受給などで教職員ら232人処分 市教委

市教育委員会は15日、出張旅費の不正受給と出退勤登録の義務違反で、校長と教頭を含む計78人の教職員らを戒告や減給の懲戒処分、154人を文書訓戒などの処分にした。今回の処分は資料が残る過去

20年で最大規模。自家用車で出張して公共交通機関使用の手続きをした不正受給3回以上の75人を戒告、2回以下の61人を文書訓戒に。不正受給の総額103万9606円は全額返納された。出退勤登録の義務違反では教職員36人と監督責任の管理職60人を処分。

16日 上下水道局部長級職員停職1か月 市議に情報提供

市上下水道局は16日、生田ふれあい広場（多摩区）の噴水ろ過装置導入の際に、福田市長の指示があったとするメモを巡る問題で資料や情報を無断で市議に提供したなどとして、部長級男性職員（59）を停職1か月の処分とした。職員から市議への情報提供を直接裏付ける証拠は確認できなかったが、資料や情報を公用パソコンから私用メールに送信、その内容が市議の質問と類似しているとした。メモを作成した職員と指示の話をした職員2名（係長級）は訓戒処分。

20日 市制100周年「飛躍祭」で記念事業スタート 6月29日開催

市は20日、今年の市制100周年を記念する事業として「かわさき飛躍祭^{ひやくさい}」を中原区等々力緑地一帯で6月29日に開催すると発表した。川崎と関係の深いアーティストのSHISHAMOやsumikaらを起用、一連の記念事業のスタートに位置付ける。飛躍祭は「100歳（ひやくさい）」の語呂合わせ、①野外音楽イベント「かわさき100フェス」②スポーツ関連の「アッと等々力フェス」③サッカーJ1川崎フロンターレとサンフレッチェ広島市の市制100周年記念試合で構成。

26日 量子技術・AI・半導体部門集約 東芝・幸区小向に新拠点

東芝は26日、幸区の小向事業所内で新研究開発拠点「イノベーション・パレット」の開所セレモニーを行った。約3千人の研究者、技術者らを集約、約340億円を投じた施設は自社、パートナー企業や顧客などを「色」に例え、混ぜ合わせて技術革新を生む場「パレット」と命名。量子技術やAI（人工知能）、半導体などの最新技術・サービスを実証し事業化加速を図る「ライブ実験場」の機能や異分野研究者の交流で「成長の種」創出を目指す共同スペースなども設けた。

26日 公園の使用不許可控訴審も「適法」東京高裁判決

在日コリアンを排斥するヘイトデモのための公園使用を不許可にされ、表現の自由が侵害されたとして市に計1500万円の損害賠償を求めた訴訟の控訴審判決が26日、東京高裁であった。「デモが行われた場合、差別的言動が騒々しく行われる可能性が高く、公園利用者や周辺住民に不安や恐怖を覚えさせるという市の判断は予想される影響を客観的、具体的に検討したもので合理的」と認定。市の判断を適法とした一審横浜地裁川崎支部判決を支持した。

28日 収蔵品水没で住民請求棄却 市民ミュージアム

2019年の台風29号で市民ミュージアム（中原区）の地下収蔵品が水没した問題で、市民団体「かわさき市民オンブズマン」が市に対し、市長や指定管理者らに計20億円の損害賠償を請求するよう求めた住民訴訟の判決で横浜地裁は28日、請求を棄却した。当時のハザードマップは多摩川の氾濫を想定、マンホールなどからの「内水氾濫」による浸水被害を予見し得ておらず、注意義務を怠ったなどとする原告の訴えを退けた。原告側は控訴する方針。

3月

1日 市内6公園2か月全面禁煙に 受動喫煙防止へ試行

市は1日から4月30日まで、試験的に市内の6公園を全面禁煙とし、園内での受動喫煙の対策の検討を始める。対象の公園は、等々力緑地（中原区）小杉コアパーク（同）大師公園（川崎区）東渡田第2公園（同）、東田公園（同）、西菅公園（多摩区）。総合公園や地区公園などの公園の規模や市へ苦情のあった公園などを選定。期間中は市の職員らがパトロール、看板やポスターを掲示する。

2日 市立看護短大29年の歴史に幕 最後の卒業生70人

本年度で閉学する市立看護短期大学（幸区）の卒業式が2日、同校で開かれた。1995年の開学以来2053人の卒業生を輩出してきたが、短大への進学者減少などで29年の歴史の幕を閉じた。卒業生は男性1人、女性69人で進学などを除き62人が医療機関などに就職予定、うち41人が市内に就職。市は4年制の市立看護大を2022年度に開学、25年には大学院も開設予定。

5日 給食産地偽装で市と和解 市側に解決金約3400万円

市教育委員会は5日、学校給食用の豚肉の産地偽装問題で、市と納品業者、加工業者の3者で和解が成立したと発表した。外国産を国産と偽って混入していた食品加工会社「寿食品」（相模原市）が市と納品業者に損害賠償相当の解決金約5180万円を支払った。給食食材の調達受託者の公益財団法人市学校給食会への寿食品からの解決金は約3414万円で給食会から市が歳入として受け入れ、学校給食の食材調達費に充てる。寿食品が納品していた商社への解決金は約1768万円。

11日 故坂本龍一さんの「東北ユースオーケストラ」初参加 被災地支援コンサート

東日本大震災で被害を受け休館した「ミュージア川崎シンフォニーホール」（幸区）が復旧支援への恩返しで始めた「被災地復興支援チャリティー・コンサート」が11日、開催された。震災発生時刻に来場者ら約1350人が黙とう。故坂本龍一さんが被災3県の若者に呼びかけ結成した初参加の「東北ユースオーケストラ」、パイプオルガン奏者の松居直美さん、ソプラノ歌手の鈴木美紀子さん、ピアニストの小川典子さんらが熱演。チケット収入と募金約223万円は過去最高で被災地へ全額寄付された。

12日 「市制100周年の認知度」市民50.6% 都市イメージ調査

市は12日、今年度の「都市イメージ調査」の結果をまとめた。市制100周年の認知度について「知っている」と回答した市民は50.6%。「市制100周年についてどう感じるか」については「誇りに思う」が38.5%、「100周年をきっかけに市や地域を知りたい」が29.5%などだった。市は市制100周年を契機に川崎の魅力を知ってもらい、若年層を主なターゲットにシビックプライド（市民の市への愛着や誇り）の醸成を図るとしている。

14日 添い寝死亡で賠償命令 市障害児施設で地裁支部判決

障害児支援施設「市中央療育センター」（中原区）で2016年、短期入所中の男児（当時9）が死亡したのは職員が添い寝中に寝入ったのが原因などとして、運営する社会福祉法人「同愛会」（横浜市）と女性職員に遺族が損害賠償を求めた訴訟で横浜地裁川崎支部は14日、被告側に計約2690万円の支払いを命じた。判決は職員が寝入ったことによる窒息死の予見可能性があったと指摘。施設側にも使用者責任を認めた。市は「当事者でないのでコメントしない」としている。

18日 市ホームページ全面リニューアル 11年ぶり

市は18日から、ホームページを11年ぶりに全面リニューアル、スマートフォンでの利用者が全体の7割以上を占めることなどからページのデザインを一新した。(1)緊急情報の発信をさらに強化(2)知りたい情報を見つけやすく(3)機械翻訳機能が充実「やさしい日本語」翻訳の政令指定都市初導入(4)オンライン手続きが利用しやすく(5)イベントが探しやすくし、使いやすさと見やすさの向上を図っている。

25日 維新、市議離団に伴い会派名称変更

市議会の第5会派の日本維新の会は25日、無所属の市議と合流し「あしたの川崎・日本維新の会」へと名称を変更した。維新は万博延期意見書採決で造反した市議の離団に伴い、会派消滅の可能性が生じ、維新側から共同会派結成の打診が行われた。会派構成は、自民党（17）、みらい（14）、公明党（11）、共産党（8）、あしたの川崎・日本維新の会（5）。

25日 プロダンスチーム「KADOKAWA DREAMS」 市スペシャルサポーター就任

市制100周年の取組みとして市ゆかりの著名人に市が委嘱する「かわさきスペシャルサポーター」に25日、中原区を拠点とするプロダンスチーム「KADOKAWA DREAMS」が就任した。国内プロダンスリーグ「Dリーグ」で昨季優勝。市は武蔵溝ノ口駅がプレイキン（プレイクダンス）の聖地と呼ばれていることから若者文化を後押し、ダンスで市や記念事業への愛着を高めることを目指す。

26日 文章作成等に生成AI導入 7月から

市は26日、業務の効率化や生産性の向上等の効果が期待される文章生成AIの利用に向け、「市文章生成AI利活用ガイドライン」を策定したと発表した。今後、生成AIサービス提供する事業者の選定を進め、導入効果の高い業務・部署を対象に7月上旬からの利用開始を目指す。市は昨年約2か月間庁内で試行利用し、文章案の作成や企画案のアイデア出し、ブレインストーミング（考え方の整理）、エクセルの関数やマクロの作成等で効果的な活用ができたとしている。

※「川崎市の主な動き」は川崎地方自治研究センターのホームページ「市政ウォッチャー」からの抜粋